第 44 回　2012 年昨夏の庭から

今年の夏は例年になく全国的に暑い日が続き、当地節電を励行しようと思いながらなかなか実行できないときが多かった。暦の上では 8 月 7 日が立秋であったが、旧暦のその日は言うに及ばずその後も厳しい暑さが続き、連日といってよいほど熱中症や水遊び中の事故などが報道された。

旧暦の二十四節気を現在の太陽暦の新暦で換算してみると、本稿を書き始めた 8 月最終週は処暑（8 月 23 日～9 月 7 日頃）の時期に入り、朝夕は幾分しのぎやすくなり、昼間が短くなったのを感じるとされている。確かにこの週末は昼間時間が短くなっているのが分かり、しのぎやすさをわずかばかりだが感じたが、夜間の寝苦しさは相変わらずで、しばしば冷房を必要とした。

この時期網戸一枚にした二階の夜は庭から聞こえる虫の声を楽しむことができたが、どこから入り込むかわからない蚊に刺されて真夜中に目が覚めることがしばしばあった。蚊に刺されると家内はアンモニアの入っているキンカンという塗り薬を使うが、筆者には強力なステロイド配合の軟膏でないと効果がない。エンマコウロギが鳴きはじめたのが 1 週前、一昨夜はクツワムシのような虫の声が聞こえた。キリギリスやハヤシノウマオイ（スイッチョ）などが聞かれるのも間もないだろう。

庭は二階建ての母屋の南面にあり、その西側は母屋から鍵形に続く一階が車庫になっている中二階のある建物で区画され、南側と東側の隣家との境界にはそれぞれコンクリート塀と鉄製の垣根がある。自庭にはそれほど広くはないが、そのほゞ中央部にあるくびれの浅い瓢箪型をした池には 7 尾の錦鯉を飼っている。十数年前の冬にそれまで飼っていた錦鯉が原因不明の伝染病で次々と死んでしまったことがあったが、途方に暮れてそのことを随筆として医事新報に載せたところ、それを読まれた三重県津市の I 先生から丁寧な助言をいただいた。そのご助言に従って改良し、汲み上げた地下水が溜まって池の最深部にできた澱みがサイフォンの原理で池の外に流れ出るようにしたのち、今は閉鎖されてしまった近郊の錦鯉養殖場から新たに同じ数の鯉を買い求めて池に放流した。

現在の池の鯉はすべてその時からのもので、これまで一尾も欠けたことはない。

津市のＩ先生とは今も交流していただいており、今年の正月には鯉の飼育に関する多数の貴重な文献や書物とともに、仙台藩祖伊達政宗公による晩年の詩「馬上少年過、世平らかにして白髪多し、残躯天の赦すところ、楽しまざるをこれ如何せん」の揮毫文をいただいた。今はその詩を扁額にして居間に飾っている。

二代目にあたる池の鯉たちは元気で、中には餌を与えるとき近じかと寄ってきて、頭を撫でてやっても逃げないものがいる。変温動物（冷血動物）の鯉たちは高温の夏は親しみやすく可愛げがあるものだが、気温が下がるにつれて素っ気なくなり、真冬には池の底でじっとして動かない。

汲み上げた地下水は、池岸にある大人の背丈ほどの高さの石の上から流れ落ちて、一端浅瀬に溜まってから池に流れ込むようになっている。石の上から池に至るまでの水の流れや庭木の種類の多いことなどのためか、時折さまざまな野鳥が庭に飛来する。それほど遠くない青葉山には現在植物園にもなっている原生林があり、十数年前までは 25 種類以上生息していたという野鳥の一部が今でも市街地にも飛来してくると思われる。近年の野鳥は、カラスやハトは別として、スズメがめっきり少なくなり、ヒヨドリ、ツグミ、カケスなどを見かけるが、今年の秋はどうであろうか。

近年の異常気象は今年の夏が時に顕著で、暑さで日常の手入れを怠ったせいもあるが、家のまわりの樹木にも明らかな変化が及んでいるようである。毎年盆過ぎに来てくれる植木屋氏も仰天するほど草木が繁茂し、荒れた庭になっていた。植木屋氏によると、庭の木々は、マツ、ウメ、ナンテン、ザクロ、ヒメシャラ、ツバキ、サザンカ、アセビ、モチノキ、イチイ、ノムラモミジ、モッコク、ドウダンツツジ、ガマズミ、キンモクセイ、ヒバ、サンショ、シャクナゲ、カキなどであり、庭とは離れた所にある玄関の西側前庭にはマテバシイ、ゲッケイジュ、ウバメガシ、コウヤマキ、カクレミノ、ナナカマド、シャクナゲ、モチノキ、シャラソウジュなどが植えられている。二人の植木職が猛暑の中で 4 日がかりで剪定して、漸くもとの日本庭らしくなった。

前庭のシャラソウジュはこの春水不足で早々と枯葉が目立ったため、枯葉領域の枝を切ってしまったところ、根に近い幹から新たな枝が出てきた。今はそれらの枝に添え木を当てている。シャラソウジュ隣のナナカマドも枯れそうになったため、今年から前庭には簡易噴水装置を取り付けることとした。

シャラソウジュは沙羅双樹と書き、平家物語巻第一の「祇園精舎」序文にある「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。・・・・」のくだりでもよく知られているが、この木は日本ではナナツバキのことであることを最近知った次第である。

ナナカマドには毎年夏に小さな花が咲き、秋には葉とともに赤く色づいた多数の実をつけるが、その頃になるとどこからとなく野鳥がやってきて実は瞬く間になくなってしまうのである。庭木の中でキンモクセイ(金木犀)とナンテン(南天)については植木屋氏に特に注文を付けている。金木犀は花期が終わってから剪定するようにし、南天は伸びるに任せるように工夫することにした。常緑低木の南天は通常高さが 2～3m であるが、自庭のものは竹製の高い垣根で支えるようにした結果、今では丈が 2 階ベランダの高さまで達している。剪定が終わってから高さを計測したところ 4.9m あった。南天には初夏に白い花が密生して咲き、毎年花期の間おとなしそうな熊蜂が蜜を求めて飛来し、晩秋から冬にかけて球形赤色の実を多くつけるが、その実も殆どが野鳥の餌となっている。

二階軒下と南天の間に女郎蜘蛛がしばしば大きな蜘蛛の巣をつくるのもこの時期である。

未だここしばらくは最高気温が日中 30 度を超すと予報されているものの、虫がすだきはじめ、ナナカマドや南天が間もなく実をつけ始めるこの頃、ほのかな秋の到来を感じる。

晩夏、秋口は健康維持に特別注意しなければならないが、夜は酒が恋しくなる季節でもある。涼やかな風が通り、庭に虫の声が心地よく聞こえる和室で、気の合った者同士で交わす、ほどほどの酒は身体に悪いはずはない